

子供達と山づくり

木曾福島町 巾崎 理一

「山の中の子供が山を知らない。」最近の林業経営は厳しい。かつては林業で生き、林業で生活した私達の時代からは想像だにできなかったことが起こってきた。若者の山離れの現実には厳しい。その若者の子供達、木を伐るところ、搬出、植林、手入等々山仕事も見たこともない子供達だ。山々に囲まれて育った子供達、山を知らずに生きられないはず。山間にある児童数わずか三十数人、黒川小学校4,5,6年生を対象にみどりの少年団が結成された。まず地元体験者、指導者によって、しいたけ栽培はじめ、山林の見学等活動をはじめた。私の林地を遠足のコースとして取り入れた。約1時間林地を見学、私の話を聞いてくれた。林地は国道からわずかな距離、子供達が入るには好都合の場所である。約2haの林地、ヒノキ主体で、スギ、サワラ、カラマツ少々の混植されているので学習には丁度よい条件である。子供達にまずヒノキ苗(3年生)を植えてみせる。このおじさんが40年前こうして植えた木がこんなになったと説明する。下刈り、間伐、枝打ち等の話を、道具を使って実演説明する。三寸五分角の製品を示し、このヒノキの木は日本一の名木の話をする。ヒノキ25年生のものを2糎(cm)位に輪切りにしたものをみんなに土産として配る。キリの木(14年生)の輪切太さ約30糎位ある。スギの立木にテープをつける。胸高約30糎はある。木の生長は樹種によって異なる話をする。間伐予定木を目測させる。ヒントを与える。枝から下は6mである。伐倒してから子供達に測らせることにする。18mの木を子供達は短く見る。18m位の木を12m位に見る子供が多い。当たるには校長先生か担当の先生、間伐木を伐倒することにする。木を伐るに昔は鋸で伐ったと鋸を見せる。受口は斧でいれて切ると見せ、今はチェンソーという機械で伐ると説明、受口を切り思う方向に伐倒する。ドスンと地響きをして倒れる。子供達は大きな歓声と拍手、すごいもんだと子供達は云う。今の子供達は木を伐るところを見たことがない。こんな山での1時間の学習、去年は黒川小学校が統合した福島小学校の5年生

の植林見学をしたい旨申し入れがあった。先生が2回程勉強にきてくれた。その後、小学校5年生57人が林地へきて学習をしてくれた。同じパターンで話をしてみた。見学後、必ず感想文を全員が書いて届けてくれる。楽しみながら読ませてもらう。その感想文に一部 巾崎さんへ

わたしは、ぜんぜんひのきや木のことが知らなかったけれど、巾崎さんがいてねいにおしえてくれてありがとうございます。わたしは木は、なえや種をうえれば、もうほっといてもいいと思ったけれど、ちゃんと木になるまで手入れをしないといけないので、とつても木を育てたりするのはたいへんですね。でも、巾崎さんは手入れなどしないといけないのに、木をうえたりする仕事をしていて、とてもすごいな。それとおみやげ、朝からひのきを切ってくれ、おみやげにしてくれてありがとうございます。ひのきのことがとてもわかったので、これから木をたいせつにして、もっともっと木曾に木などうえてみたいです。おみやげもお家にかえってかざっておきました。ほんとうにありがとうございます。お仕事ががんばってください。

林務課の普及係の方々に感想文を読んでもらって参考にしてもらった。我が町では、農林業の体験学習の受入れを計画している。今後、こんな子供達の学習に微力を尽くしたいつもりである。森林の果たす役割は極めて重要となってきた。林野庁でも「森づくりに国民的負担を。」と新しい施策を打ち出そうとしている。次代を担う子供達の教育を考えて、環境保全のためにも、森づくりは二十一世紀の重要な課題であることを強く感ずるこの頃である。